

地域共生を目指す居場所づくりに関する研究

～京都市西院老人デイサービスセンター「おいでやす食堂」の軌跡から～

南 多恵子
河 本 歩 美¹
寺 本 珠 眞 美²

I. はじめに

少子高齢時代を迎えた我が国では、高齢者をめぐる社会問題のみならず、子どもをめぐる様々な問題も顕在化しており、ニーズの多様化・深刻化は特定の世代に限ったものではないといえる。特に今日的課題として注視されるものに「子どもの貧困」がある。1990年代から上昇傾向にあり、2015年の相対的貧困率³は、厚生労働省によると15.6%であった。実に子どもの7人に1人が経済的に苦しい状態で生活をしていることになる。

子どもが貧困状態の中で育つということは、単に経済的困窮の状態に置かれているというだけでなく、発達の諸段階における様々な機会が奪われ、人生全体に影響をもたらすほど深刻な不利を負ってしまう。つまり基本的な生活基盤である衣食住、医療、時間的・心理的なゆとり、余暇・遊びにおける多様な体験、学習環境など様々な局面で家庭の状況は大きく関係する。例えば、誕生日のお祝いや季節の行事など子どもの大切な経験やつながりが経済的な理由で奪われているのが現状としてあるという⁴。

このような状況に対し、2013年には子どもの貧困対策の推進に関する法律（平成25年法律第64号、以下「子どもの貧困対策推進法」）が成立した。これは、「子どもの将来が生まれ育った環境により左右することのない社会を実現するため」（第2条）、国及び地方自治体に対して、①教育支援、②生活支援、③就労支援、④経済的支援の4つの柱からなる貧困対策を実施するよう義務づける法律である。一方、子どもの貧困対策として、市民サイドでもできることを模索する中、昨今、急激に数を伸ばしているのが「子ども食堂」の存在である。地域で子ども食堂を運営している人たちが交流をし、子ども食堂の輪を広げるための連絡会で

ある「全国子ども食堂ネットワーク」のウェブサイトがある。そこに2017年8月現在で掲載されている食堂は211団体で、北海道から沖縄まで全国に広がる⁵。また開設準備を支援する仕組みをもつ滋賀県では、2017年6月現在、県内に66か所の食堂が誕生している⁶。“食”を通じて繋がりあえる食堂の機能を活かし、市民ができる支援をと願う人たちの思いが、子ども食堂の増加を急ピッチで進めている。そしてその波は京都においても広がっている。本稿で取り上げる「おいでやす食堂」も、その波に乗り生まれた食堂の1つである。2016年12月にスタートして半年を迎え、現在では毎回、100～150名が参加する活気ある「場」となっている。ただし、当初からこままでの賑わいがあったわけではなく、徐々に参加者が増えていった。

本稿では、このおいでやす食堂の実践を軸にしながらか、その運営プロセスと参加者ニーズの両軸から分析し、その社会的意義について考察していきたい。子ども食堂には様々な形態があるとされているので、参加者数が実践の質を現すものとはいえない⁷。だが、半年間でこれほど参加が見られることの背景として、どのような運営プロセスが隠されているのかを紐解き、その要因を明らかにしておくことは、今後もまだ続くであろう食堂設立を目指す団体にとっての示唆になるのではないかと。さらに、質問紙調査により参加者が食堂という「場」に期待することを掴み、地域住民がどのような生活ニーズを抱えているのかを考察する。

繰り返しになるが、子ども食堂は単なる食堂ではなく、国の政策課題でもある子どもの貧困対策に対し、地域が市民レベルで取り組める1手法として全国的広がりを見せてきた。おいでやす食堂の動きを詳細に記録化し、分析することで見える社会的課題や意義を探索していきたい。

II. おいでやす食堂の成り立ち、発展経緯について

1. おいでやす食堂とは

まず、おいでやす食堂の概要を示しておきたい。

おいでやす食堂とは、京都市右京区にある「京都市西院老人デイサービスセンター（以下、西院デイ）」が地域貢献の一環として取り組む事業の名称である。開始時期は2016年12月。その半年ほど前から構想が持ち上がり、何度かのプロジェクト会議や助成金獲得等を経てスタートした。会議室等のある2階部分を開放し、月1回、第3金曜日の午後5時から7時半に開催されている。料金は大人300円、高校生以上の学生100円、小学生以下の子どもは無料である。名称を子ども食堂とせず、おいでやす食堂とした意味は、子どもを中心に多世代の交流を目的とした居場所づくりを目的としたことから、あえて“子ども”は使われていない。

高齢者福祉施設がその一画を活用し、地域貢献のための事業を行う例は他にもみられる。社会福祉施設を運営する社会福祉法人を会員とし、その経営基盤の強化、福祉施設の機能充実と健全な施設運営を目的として、昭和56年（1981年）に全国社会福祉協議会の内部組織として設立された「全国社会福祉法人経営者協議会（以下、全国経営協）」では、行動指針「アクションプラン2020」の中に“地域における公益的な取組

の推進”を掲げ、“福祉のまちづくり”“法人資源を活かした地域への働きかけ”“団体地域コミュニティの創造・再生”といった社会貢献事業を推進している。

おいでやす食堂は、法人資源である高齢者支援の機能や施設という場の提供と、西院デイ周辺地域の子ども達の支援をコラボレーションさせた取り組みである。そこで、食堂に誘う対象者は特に制限せず、誰もが集える居場所とすることは立ち上げ前から施設方針で打ち出された。実際、参加者の年齢層は大変幅広く、乳児から高齢者までが1つのフロアに集う場面がみられる。

湯浅（2016）によると、子ども食堂の形態は多様で、機能面から見ると、共生食堂とケア付食堂の2タイプが代表的だという（図1）。この中では、おいでやす食堂は地域づくり型（コミュニティ指向）でかつターゲット非限定（ユニバーサル共生型）に合致しているといえる。子ども食堂は多世代交流の場という意味も持つ。

子ども食堂といえば、子どもの貧困対策として広がった経緯があるため、要支援の子どもに焦点化しないことには西院デイでも議論があった。だが、すそ野を広げ多くの人たちが交わる場とする中で徐々に課題に接近していけるのではないかという方針のもと、この方式で運営されている。

地域共生はある意味、これからの時代を現すキー

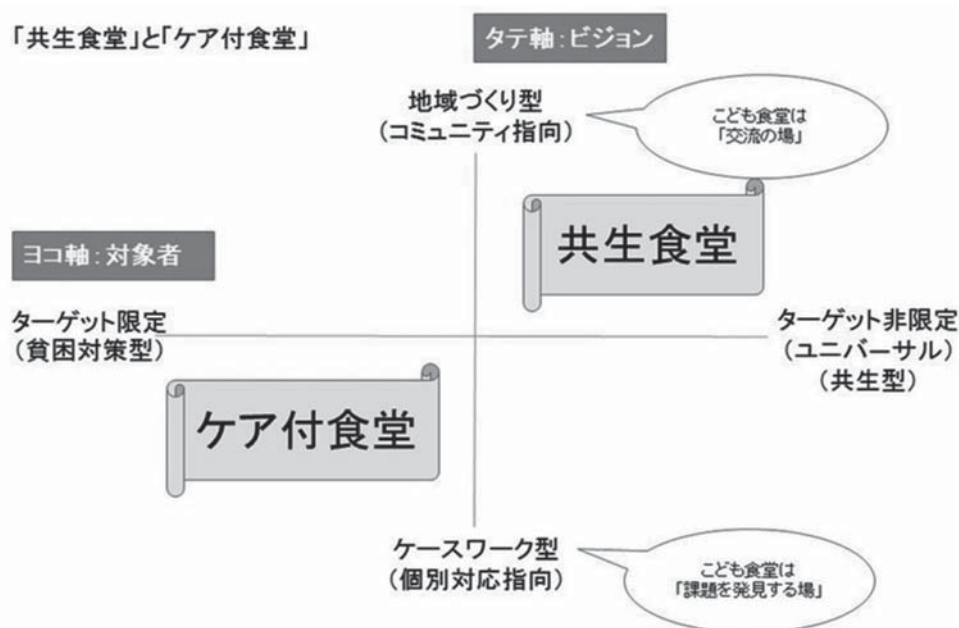


図1

出典：湯浅誠「『子ども食堂』の混乱、誤解、戸惑いを整理し、今後の展望を開く」より

ワードの1つである。2016年に厚生労働省が打ち出した概念で、他者のことも自分のことと受け止められる（我が事）、また制度横断的、包括的な支援の提供（丸ごと）を実現する地域社会のあり方を目指している。つまり、高齢、障害、児童といったいわゆるタテ割りの福祉のあり方を見直し、地域で暮らすあらゆる人たちが支え支えられる「ごちゃまぜ」の関係性の中で暮らすことができる社会である。政府は2020年代初頭には全面展開をと打ち出している。

地域共生を目指す実践モデルの1つと言われるのが、社会福祉法人佛子園がプロデュースする「シェア金沢」というコミュニティである。総面積約11,000坪に福祉施設のみならず、多様な住民が暮らす、商売する、やって来る仕組みを取り入れ、多世代が交流できる空間を生み出した斬新な事業だ⁸。

いわば街全体をプロデュースしている「シェア金沢」とは条件が違い過ぎるので全てを参考にはできないが、おいでやす食堂にも多世代が共にいる空間がある。

2. おいでやす食堂の発展経緯

次に、おいでやす食堂の発展経緯を詳述していく。そもそも、デイサービスセンターが本事業に取り組もうという第1の動機は、高齢者のより良い支援のためである。職員は普段の支援を通し、高齢になっても認知症であってもできることも多くあり、それぞれが持てる力を発揮したいニーズがあることを専門的知見から把握していた。究極の目標には働くことも視野に入る。それを実現するためには、多世代の多様な人たちが集い、互いを理解し、顔の見える関係になる必要が

ある。つまり、当事者をめぐる環境が整備されねばならないというメゾ・マクロレベルの課題が横たわっていた。認知症高齢者が理解され、力が発揮される社会とは、いわば、社会的弱者の立場にある誰もが理解され、認め合い、許容力の深い社会であるともいえよう。各地の子ども食堂誕生の追い風が足がかりになり、おいでやす食堂は、誰もが暮らしやすいまちづくりに向けた1つの試金石として活動を開始した経緯がある。

活動が具体化するのには2016年12月である。表1は、スタート時から2017年8月までの9回の経緯を示している。第1回目の参加者数は50名で、子ども食堂の1形態を標榜するにも拘わらず、その内、子どもの参加者はわずか3人⁹と低調であった。しかし、第2回目以降は徐々に人数が増えて、4月からは総勢100名を超えるラインで定着しつつある。

プログラムとしては、食事は常にカレーライスを提供し、副菜にはサラダ、おやつにベビーカステラを「たこ焼き器」を使ってその場で焼いている。カレーライスは当初は1種類だけであったが、年代に応じて選択できるように、甘口、辛口の2種とハヤシライスも用意している。レクレーションプログラムとしては、紙飛行機づくりが得意なボランティアの参加により紙飛行機づくりや折り紙を、最寄りの小学校PTAサークルによるお話の読み聞かせをほぼ毎回、開催している。その他に和太鼓演奏など単発で組まれるときもある。それぞれ、行きたい時に行きたい子どもや保護者が選ぶ自由参加のプログラムである。おいでやす食堂には高齢者の参加も多いが、高齢者はこうしたプログラムには参加せず、特定の場所に集まり会話を楽しむ様子

表1 おいでやす食堂の発展経緯（参加者数） (単位：人)

日程	参加者数						
	0～6歳	小学生	中学生	高校生	大学生	大人	65歳以上
2016年12月16日	50						
2017年1月20日	70						
2017年2月17日	98						
2017年3月17日	135						
2017年4月21日	30	31	9	3	2	44	16
2017年5月19日	32	15	8	0	0	35	24
2017年6月19日	46	16	0	0	7	47	31
2017年7月21日	48	22	4	1	2	48	29
2017年8月19日	29	17	7	0	0	29	21

注) 2016年12月～2017年3月の4回は年齢別のカウントがなされておらず、対象別の数は不明。

が見られる。また、子どもが遊んでいる間、子育て中の保護者層も特定の場所に集まり会話を交わしている。こうしてみると、①. 高齢者の人たちのゾーン、②. 子育て中の保護者のゾーン、③. レクリエーションプログラムに参加する親子、子どものゾーンの3つのパターンに分けられる。場所の狭さ、移動しにくさも要因かもしれないが、年代間の活発な交流風景はまだ見られない。徐々に参加者が増えゆく中で、参加者ニーズに適合するスタイルが①②③のパターンを生み出しているのではないかと。

参加者数が増えていった背景を紐解くと、職員の日ごろのネットワークが関係していることが見える。全国の子ども食堂の運営形態を見ると、そもそも子どもが集まりやすい小学校や児童館等と隣接する立地であったり、相互の協力体制を構築した中で行われているものもみられる¹⁰。西院デイでは、ボランティア活動の受け入れや施設開放の一環で部屋の貸し出しなどを通じ、従来から地域の関係各位との関係作りには力を入れていた。だが道路を挟んだ先に高校は1校あるものの、児童館や小中学校は帰り道に立ち寄れる立地とは言いがたかった。年に数回、施設体験の受け入れをするという繋がりがあったが、太いパイプではなかった。しかし、食堂運営のために協力が得られるよ

う、関係各位に働きかけを行っていった。その経過は表2の通りである。

協力依頼の結果は、多くの団体/個人からほぼ快く協力が得られている。しかし、晩の時間帯に実施するおいでやす食堂なので、小学校の帰り道に何かあってはリスクがあるということからA小学校の組織としての協力は難しかった。近隣の各種地縁団体については、開始後に実際の様子を見て理解が浸透した。協力したいがリスク等の要素があれば、残念ながら即座の判断はできず「保留」となる。

地域でともに育む子ども達が気軽にやってこられる場であるためには、運営当事者である施設職員と子ども達との関係性のみならず、“西院デイに子ども達が行っても安心だ”と思ってもらえる地域関係者からの信頼があってこそ成立する。小学校と離れている西院デイの場合、保護者同伴で来ることができる条件下でなければ呼びかけにくい。こうした関係構築の結果として、参加者の年代層はもともと高齢者層と児童館を利用する子どもと子育て中の保護者層という2大カテゴリが生み出されている。中学生～大学生の参加が低いことも特徴だ。多世代交流の場を目指すうえで強み弱みの傾向が生まれてきている。

表2 おいでやす食堂への協力体制の構築

時期	協力依頼先	団体/個人	協力内容	結果
2016年9月	セカンドハーベスト京都	団体	食堂設立に関する指導、広報協力	可
	登録ボランティア	個人	ボランティアとしての協力	可
2016年10月	京都光華女子大学	団体	学生ボランティアの募集協力	可
	近隣地縁団体	団体	食堂設立に関する理解、協力	保留
	デイ近隣住民宅	個人	趣旨に賛同し、チラシの掲示	可
	A小学校	団体	食堂の広報協力	保留
	B児童館	団体	趣旨に賛同してもらい、チラシ掲示	可
	C保育所	団体	趣旨に賛同してもらい、チラシ掲示	可
	D幼稚園	団体	趣旨に賛同してもらい、チラシ掲示	可
	E学習塾	団体	趣旨に賛同してもらい、チラシ掲示	可
	行政(右京区地域力推進室)	団体	助成金申請、広報協力	可
2016年12月	近隣地縁団体	団体	食堂設立に関する理解、協力	保留
	京都府協働募金会	団体	はあとバースデー事業、ケーキの寄付(先方より協力いただく)	
2017年1月	近隣地縁団体	団体	食堂設立に関する理解、協力	可
2017年2月	サンケイリビング新聞社	団体	取材記事掲載、次回開催日時の案内	可
	行政(市民新聞)	団体	次回開催日時の案内	可
2017年8月	京都市市民協働課	団体	食材提供の連携先の紹介	可

注) 依頼時の対応の一覧であり、保留の団体も時間的経過と共に賛同いただいている。

3. おいでやす食堂をサポートする外部団体

主軸として運営するのは西院デイの職員集団である。ただし、職員有志がボランティアとなって活動するスタイルをとっている。その理由はいくつかあり、1つは施設経営上の問題がある。もう1つは地域住民目線に立ち、地域と協働するスタンスで関わりやすくするためだ。加えて、事業運営するにあたって必要な資源、つまり“ヒト・モノ・カネ・信用・情報”といった経営資源がどうしても必要になる。

湯浅によれば、全国の子ども食堂関係者の悩みで多いのは、①人、②お金・食材、③場所、④広報・周知・連携、⑤2つのホケン（保健と保険）の5点だという¹¹。いわば運営面の基盤整備をどうカバーしていくのかは活動の継続に大いに影響する。

西院デイの場合、運営全般に関する助言や時に食材提供のサポート団体として「(特活)セカンドハーベスト京都」¹²の協力も得ている。セカンドハーベスト京都は、安全に食べられるにも関わらず今まで廃棄されていたであろう食品を集め、支援を必要とする人々を支える団体等に提供する活動を通して、京都における食品ロス削減とフードセーフティーネットを両立させる社会インフラの一つとなることを目指す市民活動団体である。活動の一環で、子ども食堂への食品を寄付や、運営の相談にも応じている。特に立ち上げ期は運営ノウハウの集積がある団体からのスーパービジョンがあれば心強い。

4. おいでやす食堂の運営

セカンドハーベスト京都の助言も活かし、関係各所との関係構築を深めている。2017年8月現在、おいでやす食堂の事業運営は表3のようになっている。

以上のことから、1つの事業を運営するために実に多くの関係者の関わりや協力が基盤にあり、それらの信頼関係の上に月1回の定期開催が可能となっている。これらの基盤整備が短期にできるのは、西院デイの実践を通じて普段から地域とのかかわりを育んできたことは大きい。

ただし、開始後まだ半年というタイミングである。数々の課題も現れている。1つ目は、関係者間の意思疎通や合意形成には必要な、全員が顔を合わせる機会は今のところないことだ。主要スタッフは職員が担うので、運営に要する議論は職員間で行われる。運営に携わるボランティアスタッフも含めた定例ミーティングや振り返りの会はなく、立ち上げ前の2016年11月に1回、半年が経過した2017年6月に1回開かれたのみである。全員が顔を合わせることができると日程調整が困難で、かつ、食堂当日も晩の時間帯であるためミーティング開催をするには時間的に遅く、有効な手立てが見いだせないまま今日に至っている。その結果、2つ目はPDCAサイクルが活用しにくい、反省点を踏まえた改善への意見収集が困難となっている。関係者のニーズ分析もできていなかったことも課題の1つであったことから、調査を実施する運びとなった。

表3 関係先一覧

	関係先	備考
① 人	<ul style="list-style-type: none"> ・施設近隣の住民（ボランティア） ・近隣大学の大学生 ・「セカンドハーベスト京都」登録ボランティア ・その他ボランティア 	京都光華女子大学学生もボランティアとして初回から参加。
② お金・資材	<ul style="list-style-type: none"> ・参加費 ・右京まちづくり支援制度の助成金（行政の助成金） ・施設経費より補填 ・「セカンドハーベスト京都」からの食材寄付 ・京都府協同募金会より毎月ホールケーキ2個寄付 	食材が常に不足。特にお米の寄付があれば望ましいが、そこはつながっていない。
③ 場所	<ul style="list-style-type: none"> ・西院デイ 2F フロア 	
④ 広報・周知・連携	<ul style="list-style-type: none"> ・施設近隣の住民宅で張り紙 ・学区社会福祉協議会に説明 ・右京区社会福祉協議会に説明 ・新聞報道 ・参加者の口コミ 	※一部、表2と重複
⑤ 2つのホケン（保健と保険）	<ul style="list-style-type: none"> ・夏季期間はスタッフ全員検便実施 ・「しせつの保険」の適用（全国社会福祉協議会） 	ボランティアスタッフも含む。費用は施設負担。

Ⅲ. 参加者の実態把握・ニーズ動向

1. 研究方法

(1) 調査対象と方法

本研究では、おいでやす食堂の参加者へのアンケート調査を実施した。

8月実施の参加者に対し無記名自記式調査票を会場で手渡しし、その場で回収した。対象者への倫理的配慮として、質問紙に調査は任意、無記名で行い、個人が特定されないことを明記した。調査期間は、2017年8月19日である。この日の参加者は子どもから大人までの全103名で、その結果、57名から回答を得た（回収率は55%）。そのうち属性に対する回答が不明であった4名を除いた結果、最終的な分析対象者は53名となった。分析に用いるサンプルの概略は表4に示した。なお、アンケート調査の実人数には、0歳児から小学校6年までは、保護者がアンケートに答えているので、分析には含まれていない。調査項目の設定については、「おいでやす食堂について」「おいでやす食堂以外に出かけておられる場所・居場所について」「今後の居場所づくり参加について」「ご自身の年齢より上のかたとお話・聞いてみたい事について」「おいでやす食堂に関する意見・要望」の5つのカテゴリーを用意し、合計12の設問で構成した。

2. 結果—おいでやす食堂についての実態について(アンケート調査から)

「おいでやす食堂について」については、「問1 おいでやす食堂は何で知りましたか」は図2に、「問2 おいでやす食堂の曜日、回数、時間帯等について」は図3に、「問3 おいでやす食堂に参加して楽しみなことは何ですか」は図4に、「問5 おいでやす食堂への参加理由について」は図5に示したとおりの結果である。

「おいでやす食堂以外に出かけられる場所・居場所がありますか」は図6に、「今後、子どもの居場所、あるいは、多世代交流の居場所づくり等に参加したいと思いますか」は図7に、「ご自身の年齢よりも上の人とお話をしてみたい、聞いてみたい事はありますか」は図7に、「おいでやす食堂等の居場所で披露できる特技について」は表6に、「おいでやす食堂についての意見・要望」は表7に示した。

表4 調査対象者の属性 (n=53)

		人数 (%)
年齢	0歳～6歳	7名
	小学校1年	2名
	小学校2年	1名
	小学校3年	0名
	小学校4年	0名
	小学校5年	1名
	小学校6年	4名
	中学生	7名(13)
	高校生	0名(0)
	専門学生/大学生	0名(0)
	20歳代	1名(2)
	30歳代	10名(19)
	40歳代	12名(23)
	50歳代	1名(2)
60歳代	1名(2)	
70歳以上	17名(31)	
未回答	4名(8)	
性別	男性	13名(25)
	女性	40名(75)
お住いの地域	西院学区	28名(51)
	山ノ内学区	4名(8)
	安井学区	1名(2)
	その他の右京区	2名(4)
	中京区	13名(25)
	その他	3名(6)
	未回答	2名(4)

注:0歳から小学校6年までは、調査対象には含まない。

問1(図2)のおいでやす食堂の知ったきっかけについて質問をしている。もっとも多いのは、「知人から聞いた」の24名で、次に「ママ友から聞いた」の13名、「地域の掲示板」は5名、「市民新聞」2名、「ホームページ」1名であった。「その他」の14名で内訳は、「西院の体操教室で知った、保育所、西院のカフェ、民生委員から聞いた、直接職員から聞いた、家族から聞いた」等であった。

問2(図3)では、おいでやす食堂の運営回数、日時等について尋ねている。もっとも多いのは、「今のままでの曜日でよい」の46名で、次に、「回数を増やしてほしい」の9名、「曜日を変えて欲しい」が1名、「その他」の初めてで分からないが1名であった。「時間帯を変えて欲しい」と回答された方は全くおられないという結果であった。

問3(図4-1)では、おいでやす食堂に参加して楽しみなことについて一つだけにしぼって回答してもらった。もっとも多かったのは、「カレーやハヤシライスなどが食べられる」の36名で、次に「色々な年

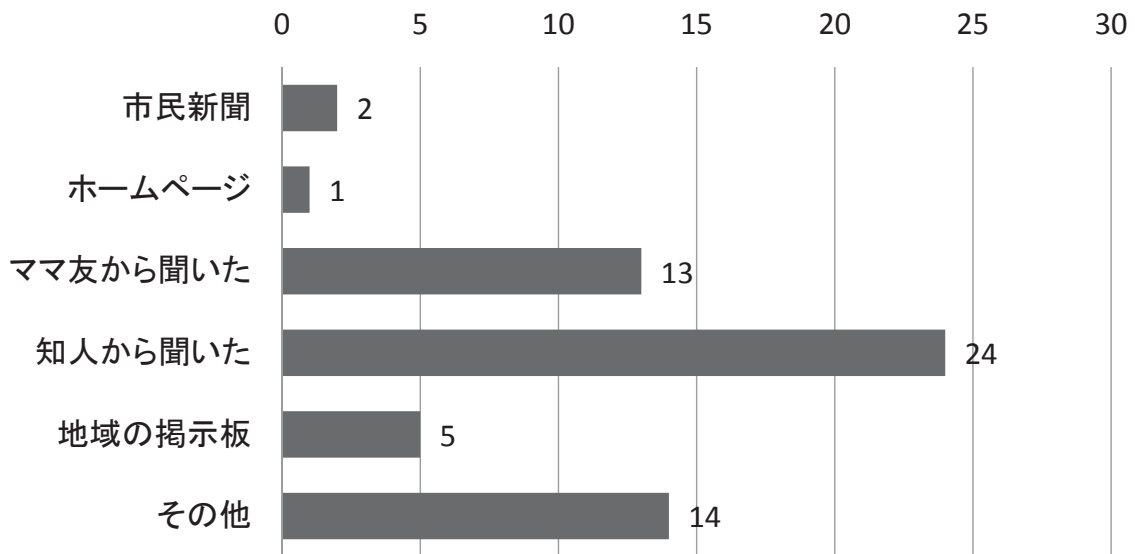


図2 おいでやす食堂は何で知りましたか (単位：人)

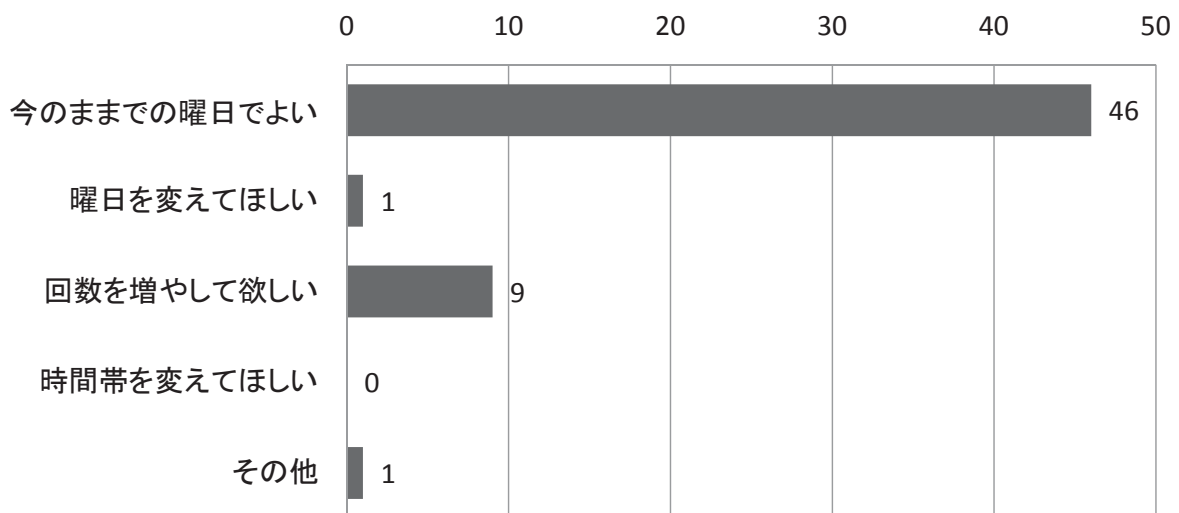


図3 おいでやす食堂の曜日、回数、時間帯等について (単位：人)

代の人との交流(多世代交流)」「近所の人と会える」「折り紙」の8名で、「他のお母さんとのおしゃべりや情報交換」は7名、「読み聞かせ」は6名であった。「その他」は2名で、その内訳をみると、「コーヒーが飲めるから、初めて来たので分からない」という意見であった。

問4(図5-1)では、おいでやす食堂の参加理由について複数回答で尋ねている。一番多かったのは、「わいわい集まれる」の29名で、次に「人と会えるから」の24名、「手軽に外食できる」が23名、「いろんな世

代(子どもから高齢者)の人と会えるから」「安心できる場所」「その他」2名の内訳は、「子どもが楽しめる」からの意見であった。

問5(図6)は、おいでやす食堂以外に出かけておられる場所があるかの有無を尋ねている。「ある」と答えた方は26名、「ない」と答えた方は23名であった。

問6(図7)では、子どもの居場所・世代間交流の居場所づくりなどへの参加意思について尋ねている。

「手伝い程度なら」と「仕事をしており参加は難しい」は同数で15名、次に「参加したくない」9名、「運営

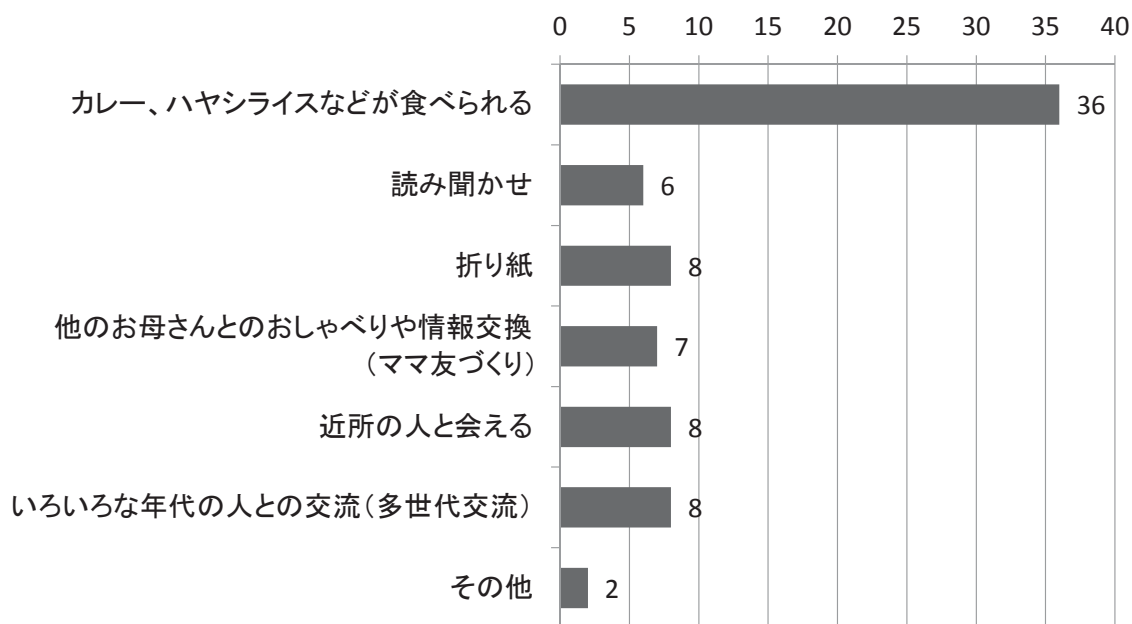


図4-1 おいでやす食堂に参加して楽しみなことについて

(単位：人)

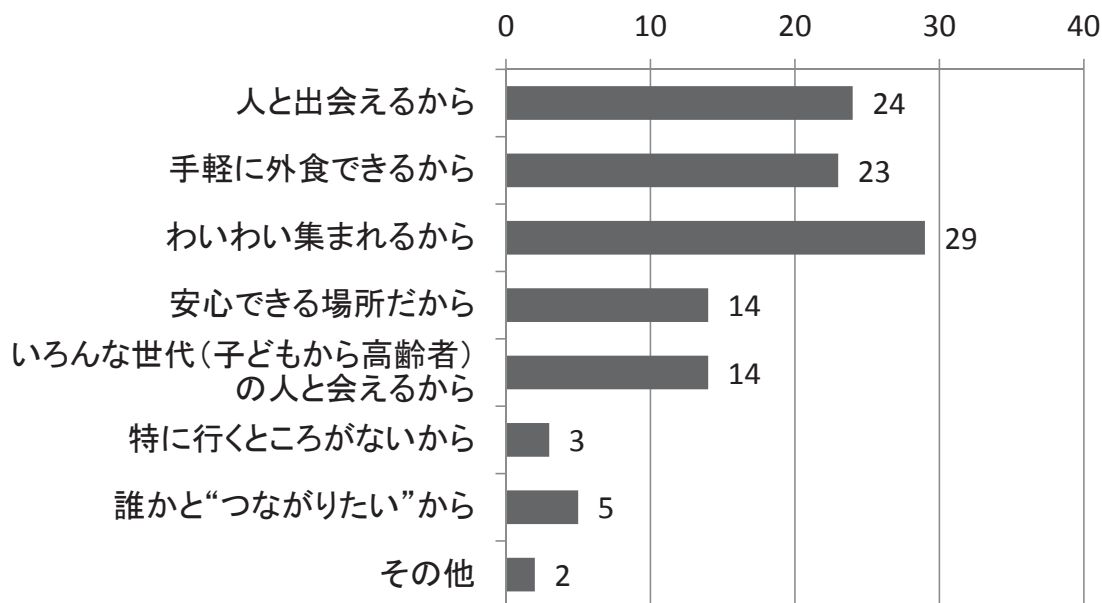


図5-1 おいでやす食堂への参加理由について

(単位：人)

に関わりたい」と答えた方は1名であった。「その他」で回答した3名の内訳は、「気持ちはある、歩行不自由な私でも手伝えることがあるなら…、時間があれば」との意見であった。

問7(図8)では、多世代交流の場として発展させていくためには、どんな取り組みができるかを考え、

多世代交流できる話題は何かを探るために、自身の年齢よりも上の人と話してみたい、聞いてみたい事を尋ねた。「ある」と回答した方は、17名、「ない」が、19名であった。「ある」と回答した方には、具体的に回答してもらった。その結果、最も多いのが、「子育てについて」であった。次に、「先輩のお話を聞か

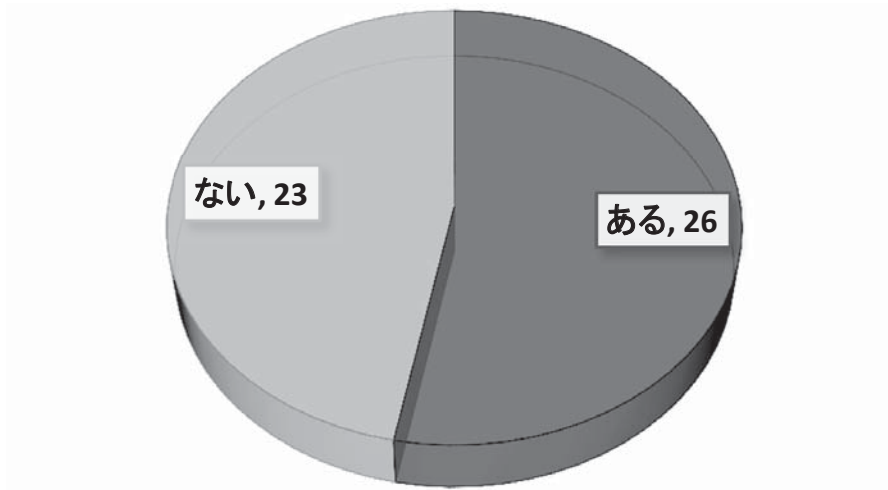


図6 「おいでやす食堂」以外に出かけている場所・居場所の有無 (単位：人)

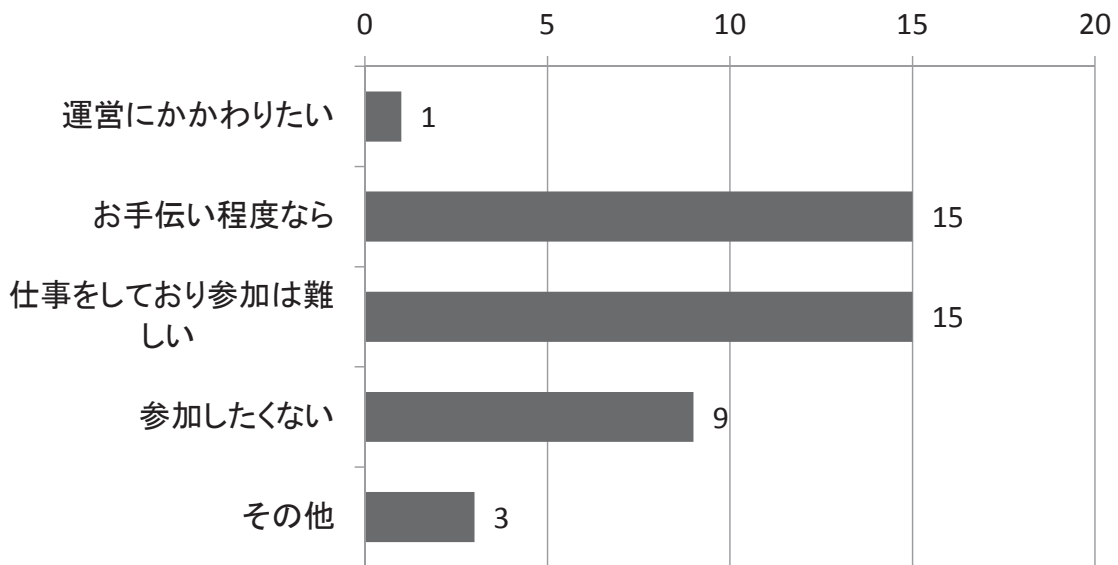


図7 子どもの居場所、多世代交流の居場所づくりに参加について (単位：人)

せてもらう」「京都のこといろいろ」「京都のわらべうた」「昔話」「世間話」「何でも」であった。

おいでやす食堂などの居場所で披露できる特技については、年代問わずどの世代でも活躍できる場づくりをするために、自由記述で尋ねた。その結果は、表6の通りである。

おいでやす食堂についての意見・要望は自由記述で尋ねた。表7の通りで、28名から意見・要望、感想などがあげられた。

3. 考察

(1) おいでやす食堂について

図2からは、半数以上が、「知人から聞いた」や「ママ友から聞いた」方であり、口コミによるものである。「その他」からの回答からもわかるように、西院カフェ(地域の居場所)、体操教室で知ったこともあげられる。また、その他の口コミ理由の一つに、西院デイサービスの取り組みである空きスペースや空き室の貸し出し、積極的なボランティアの受け入れなどによる西院デイの施設を知ってもらう取り組み、今までの積み重

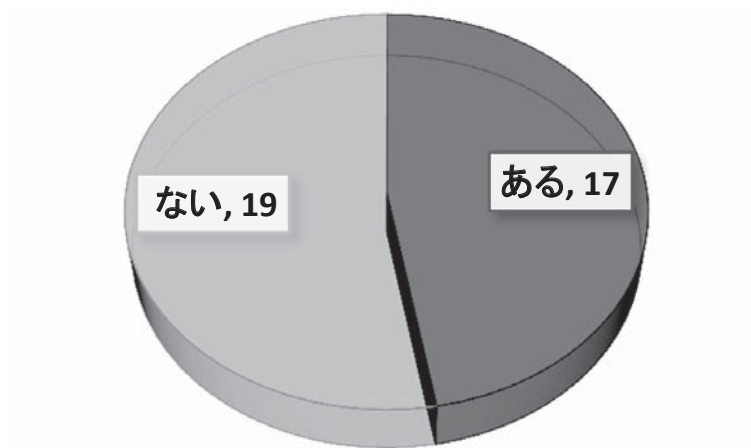


図8 ご自身の年齢よりも上の人とお話してみたい、聞いてみたい事について (単位：人)

表6 披露できる特技について

1	わらべ歌
2	ダンスや歌 (カラオケ)
3	読み聞かせを練習中

ねなどによる口コミ等が、おいでやす食堂を知っていただく機会となっている。

図3からは、「今までの曜日でよい」との回答が一番多かった。その理由として、ある高齢者から「おいでやす食堂があると、曜日がわかる。」「自分の生活リズムを作ることができる。」等の声が聞かれた。

図4-1では、おいでやす食堂への参加で、一番楽しみにしていることを挙げてもらった結果、一番多かったものが、カレーやハヤシライスなどが食べられるとの回答が半数だった。この理由として、一人暮らしの高齢者から「一人暮らしなので、カレーやハヤシライスを作ることがない。」「一人なので、カレーはレトルトが多い。しかし、ここに来たら、手作りのカレーが食べられる。」「いつも一人で食べているから、皆と食べるのが楽しいし、美味しい。」「一人やといいかげんな食事ですませてしまうしな。」と話しが聞かれ、食事をするだけがおいでやす食堂への来る理由ではなく、みんなと食事ができる楽しみやいい加減になりがちだった食事面の改善にも繋がっていると考えられる。また、図5の「手軽に外食できる」と回答された方23名(43.3%)からもうかがうことができ、若いお母さん世代から「仕事で月一回、食事を作らなくても良いので助かる。」との声が聞かれた。

次に、おいでやす食堂に参加して楽しみなことにつ

いて年齢別にみると、以下の図4-2のとおりであった。

図4-2からの年代別にみても、中学生においては、多世代交流よりも食堂という大きな役割を果たしていることがわかる。また、70代以上に関しても食堂という役割が大きいことがわかる。

しかし、本来のおいでやす食堂の設立目的でもある「誰もが集える居場所」「地域住民が活躍できる居場所」が疎かになり、単にレストラン化してしまうことに注意をはらわなければならない。

図5-1において、おいでやす食堂への参加理由を詳しく見てみると、「わいわい集まれる」「人と出会える」との回答がもっとも多かった。65歳以上の4名グループのAさんからは、「月一回、ここに来ることで、月一回、仲間と出かけるところの相談ができる。次に行くところは、花園会館(夢芝居)に行く事になった。」と話を伺うことができた。また、Bママさんからは、「おいでやす食堂は、ママ友との会える時である。」Cママさんからは「子どもが小学校に行くまでは昼間の時間に会えていたが、小学校に子どもが通うようになってからは、昼間会える時間がなくなった。なので、夕方からの会える時間が嬉しい。」と、喜びの声が聞かれた。このことは、地域の中の集える施設、地域の中の集える居場所、顔の見える関係の中で相談できる居

表7 おいでやす食堂についての意見・要望

1	いつも楽しく参加させて頂いております。今後も楽しみにしております。運営が大変だと思いますが、頑張っ て欲しいと思います。
2	美味しいです。1人でハヤシカレーを作っても、おいしくないの・・・。
3	上等です。満足している。食事の後片付けをしなくて助かっている。
4	ありがたいです。
5	いつも端子ませてもらっています。これからも続けて頂きたいです。
6	何度か参加させて頂いております。ママ友と集まれる場所が出来てうれしく思っています。今後ともよろしく 願います。
7	今日、初めてなので、まだよくわかりません。
8	いつも参加しています。
9	今のままで良いと思います。
10	素晴らしい企画やと思います。
11	毎回美味しく頂いております。
12	楽しいです。
13	毎回楽しみにしています。
14	毎回親子でとても楽しみにしています。
15	とてもありがたく、楽しく利用できて、いつも待ち遠しいです。ずっと続けて欲しいと思います。
16	いつも本当にありがとうございます。感謝しかないです。
17	来てカレーが無くなっていたら残念です。前回、ショックで帰りました。
18	楽しい。
19	楽しくさせてもらっています。
20	毎月は来れませんが、楽しみにしています。
21	子どもが美味しいカレーが食べられる。お友達と一緒に来られる。折り紙や遊んでもらえることが嬉しい みたいです。
22	楽しい良い集まりですね。
23	嬉しいです。
24	二回目ですが、通いやすく続けて通いたいです。
25	楽しみに来ました。
26	レトルトの時があって残念でした。
27	毎回、レトルトカレーだったのが残念でした。
28	友達親子とご飯を食べつつ、お話しができて、お話しができる。ありがたい場所です。

場所としての役割を担うことができつつあるのではないかと考える。今後の発展に期待したい。

次に、おいでやす食堂の参加理由について年齢別にみると、以下の図5-2のとおりであった。

図5-2からは、中学生、30代は、「ワイワイ集まれる」が一番多く、おいでやす食堂には、人が集まるにぎやかなところを求めていることがわかる。70歳代以上は、おいでやす食堂に「手軽に食事ができる」ところや「人と出会える」ことを求めている。70代のこの二つの結果から、一人で食事することへの寂しさなどが感じられ、近所の人、知っている人等に会いたいことが読み取れる。その一方で、食事の準備等への億劫さもうかがえるのではないだろうか。

(2) 子どもの居場所づくり、あるいは、多世代交流の居場所づくりなどへの参加について

図7から、「運営にかかわりたい」に1名、「お手伝い程度なら」に15名がおられるということが示された。これらは今後の発展のための「協力者・共同者」であるということがわかる。言い換えれば、「食事だけをしに来ている人ではない」ということがわかる。この16名の意欲をどのように今後の居場所づくり運営に巻き込んでいくのが課題である。また、居場所づくりだけでなく、この意欲ある方の力をどのように地域で生かしていけるのかも課題の一つである。

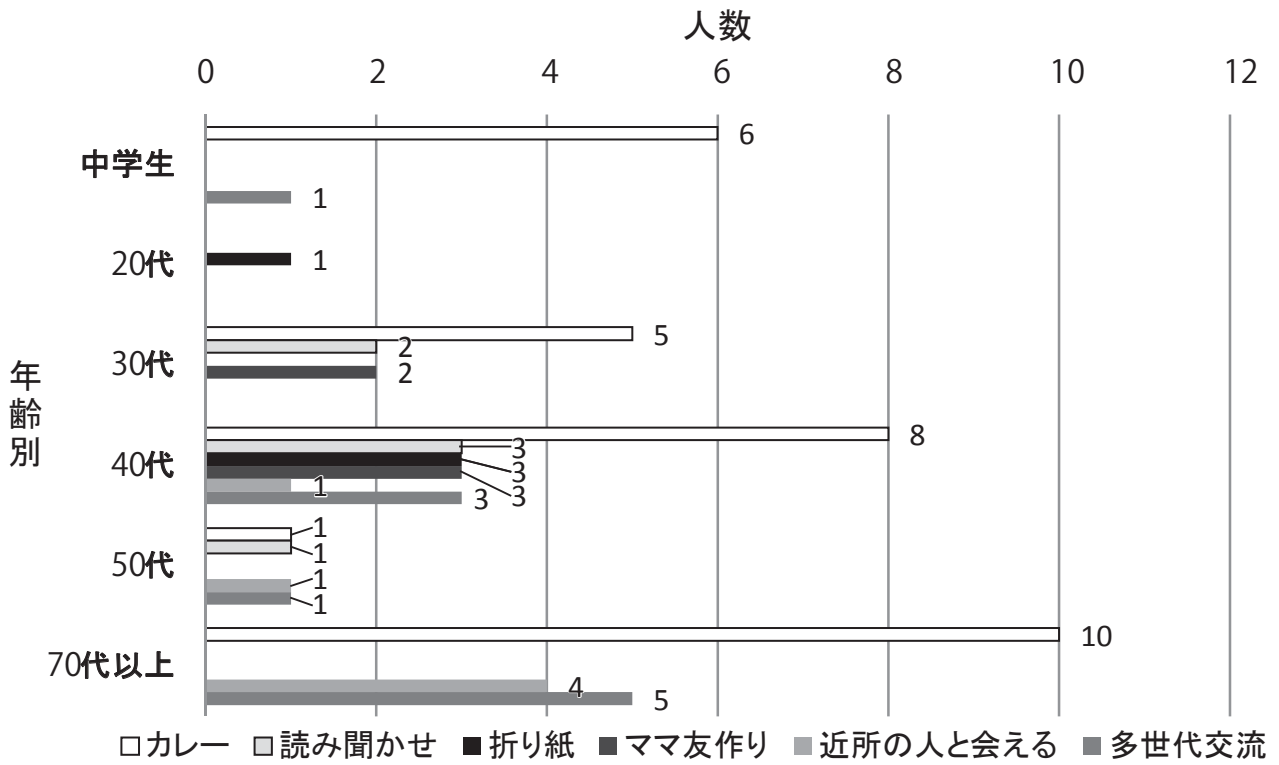


図4-2 おいでやす食堂に参加して楽しみなことは何ですか。(年齢別)

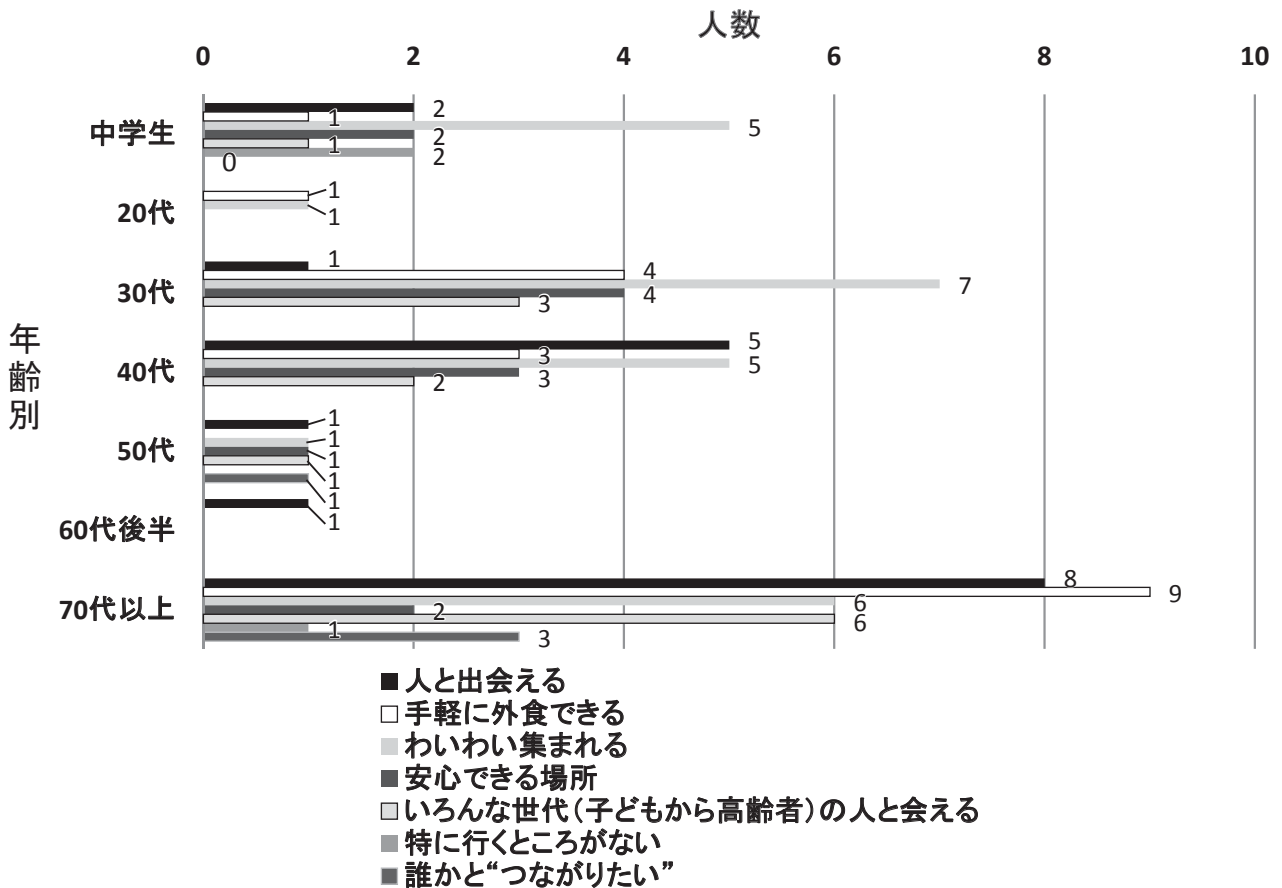


図5-2 「おいでやす食堂」への参加理由についてお聞かせください。(年齢別)

(3) おいでやす食堂の居場所で、話してみたい、聞いてみたいことについて

この設問（図8）の意図は、昨年12月からおいでやす食堂の運営をしているのだが、若いお母さん世代と高齢者世代が分かれての食事になっている現状があり少し残念だと感じていたことが一つのきっかけになった。

そこで、多世代交流の居場所にするためには、どんな仕掛けが必要なのかを探るために、この設問を試みた。

図8から、単なる食事をする場所だけではない多世代交流の居場所にするための施設側の仕掛けづくりが必要だと感じている。その為、食事をする以外にどんな仕掛けが必要かを探るために質問をした。その結果、「子育ての話」が最も多く、その他、「京都のこといろいろ」や「昔話」などがあげられた。この子育てのテーマは、どの世代の方も経験してきている共通の話題であり、多世代交流の一つの仕掛けづくりになると考える。

(4) その他

表7は自由記述で挙げられた意見である。概観すると、「楽しみにしています。」との意見が多く、次いで「続けて欲しい」との意見もあり、地域の中の出かけられる一つの居場所にもなっており、個々の一か月の予定の中に組み込まれ、毎日の生活の中の楽しみの一つになっていることがわかる。その一方で、「カレーやハヤシライスが品切れで、レトルトのカレーになっていたことは残念です。」と意見があり、施設としての今後の課題の一つである。

IV. 地域共生を目指す拠点として発展させるためには

以上を踏まえ、おいでやす食堂が多世代交流型の地域共生を目指す拠点として更に発展させていくためにはどうすればよいか。本章では、そのための考察を試みたい。

1. 運営面にみる諸課題

西院デイの運営母体は、高齢者福祉施設「西院」である。デイサービスセンター、地域包括支援センター、居宅介護支援事業所、小規模多機能型 居宅介護事業

所を運営する複合施設だ。「誰もが暮らしやすい地域づくり」をミッションに「居場所」づくりの活動を今までも実施してきた。おいでやす食堂もその一環として運営してきたものである。これは、運営主体の社会福祉法人が行う「地域に向けた公益事業」の取組としても位置づけられる。

そういった位置づけの元では、対外的には運営の継続性が容易であるように捉えられがちだが、この事業がもつ運営主旨を勘案した時に、施設職員主体の運営や施設経費として財源を確保し続けることが難しい。介護保険の事業収入が経営の柱であり、「地域に向けた公益事業」を拡大してもそれに対する収入は保証されない。そのため外部からの補助金獲得や無償のボランティア協力といった取り組みが欠かせなくなる。そこにこの食堂を継続するにあたっての課題が見えてくる。

まず、運営面からの課題を以下にまとめる。

(1) 運営体制の課題

高齢者福祉施設「西院」では、運営する各事業所で、今までも様々な「地域に向けた公益事業」を運営してきた。いずれもボランティアの協力はあるものの、ほぼ施設主導であり職員主体の運営なのが現状である。今回、おいでやす食堂を開始するにあたり、これまで同様の進め方で取り組みうとした。だが、表3で示したように地域の各種団体にアプローチした際に、実際には様々な方よりご意見があった。

おいでやす食堂については、多世代交流食堂として運営したいと打ち出したものの、対外的には子どものみが対象の子ども食堂として捉えられることが多く、関係各所へ丁寧に説明し理解を求めるアプローチが極めて重要であった。それは、子どもを地域で見守り、育成していく観点から、子どもも交えた地域の「居場所」を地域との関係性の中で作っていく形態を取ることが求められていたためだ。もちろん、今までもその視点を持って取り組んできたが、今回の取組みにはより意識する必要があることを学ぶこととなった。この学びは、おいでやす食堂の実施回数を重ねるごとに実感できるものになった。具体的には、子どもを共に育くもうとする地域住民から何らかの形での協力の申し出やボランティアの申し込みがあったり、参加者を募る声掛けを各種関係機関へする活動がみられたり、地

域住民が積極的にかつ自主的に食堂運営の活動をする様子がみられるようになった。地域の「居場所」を盛り上げる当事者感覚を持って、共働する住民や団体がつながり合う様子が伺える。このことを踏まえ、スタートは施設主導にはなるが、ゆくゆくは住民が主体となり、この取組みが地域のものとなっていくプロセスを意識し、サポートという形で職員が関わりをもつ必要があると感じている。

しかし、このような形で運営形態を実現するには、運営目的の明確化と体制作り、コーディネートする役割を担う職員の育成が必要となる。一人ひとりが役割を持ち主体的に動ける社会、支え合える地域共生の居場所づくりには、その力を発揮できるようにするという専門性が要するということだ。これらの整理と具体的構想を顕在化させる手法の検討が今後、必要となってくる。

(2) 地域の「居場所」としての継続性

長田（2017）は、「場所」と「場」は違うと述べている。場所は地図で示せる点、施設（店、オフィス、会議室、公園）などを指し、「場」とは主に人と人とのつながり方が生み出す雰囲気、可能性を指す。¹³とすれば、おいでやす食堂は後者でなくてはならない。利用する方にとっての「場」となり、拠り所となるということである。私たちには、おいでやす食堂が長期間継続していくことに注力をしないといけない。それは、表7にもあるように参加者からの要望でもある。だが、運営課題の中でも一番の懸念事項である。前段でも述べた通り、運営体制の構築と同時に課題となるのが財源の確保である。

公益事業実施のための経費として予算化することは現在のところ可能となっているが、前述したように、地域の方による地域の取組としていくビジョンを考えた時に、財源面においても施設から独立化していく方向での検討も必要である。西院デイの場所提供は今後も可能だが、流動経費である食材や資材など地域にあるもの、地域で活用できるものを生かす方法、その調達の仕組みづくりが求められる。そのためには、地域にある企業との連携も必要となってくる。

(3) 高齢者や認知症など要介護状態の高齢者が活躍できる場づくり

おいでやす食堂の運営目的には、当初から、地域の高齢者や認知症など要介護状態の高齢者が活躍できる場とすることを念頭に置いていた。認知症や障がいがあっても今なお活躍できる能力をもち、周りのちょっとした手助けがあれば、様々な活動に参加し、自身が輝ける瞬間を過ごすことが可能となる。また、対象となる高齢者がおいでやす食堂でそのことを体現することで、高齢者が地域社会で活躍できる機会となると同時に認知症や要介護状態の高齢者への理解が深まると考えている。しかし、現状では、地域のボランティアが活躍する機会にはなっているが、認知症高齢者を含む要介護高齢者が活躍できる取組までには至っていない。高齢者それぞれの得意分野を知り、当事者が自主的に活動できる働きかけが必要となってくる。そのためには、運営主体となっているデイサービスセンターや小規模多機能型居宅介護の利用者に対しての声かけ、地域包括支援センターとの連携が必要となり、そこから運営の担い手を募ることも視野に入れていく必要がある。

(4) 多世代交流食堂を目指す

安定的な参加が見込めるようになってはきたが、Ⅱ・Ⅲ章でも触れたように、交流機会が少ないのは課題である。そして、参加年代に偏りがある。真に多世代交流食堂となるための意識した仕掛け作りが必要である。子ども世代、親世代、高齢者がそれぞれで過ごす場面が多く見られ、そこに交わる接点がない。

現在、地域のボランティアが持つ様々な特技を生かすことで、世代間交流が生まれる仕掛けを実施し始めている。しかし、アンケート結果にも、同世代と話す機会であることが楽しみであり、それが有意義な時間となっていることが見て取れる。この様な貴重な時間を持つことが、参加者にとって有益であるならば、その時間を確保しつつ、それぞれの世代が持つ知識や話題を共有し合う時間も取る方法を検討したい。具体的な取り組みとしては、2017年7・8月に実施したレクリエーションプログラム「がま口ワークショップ」や「太鼓演奏」による交流がある。少しずつだが、作業や音楽を多世代で一緒に楽しむことを通して交流が生まれている。そのことで、互いに自然な話しかけができるなど顔見知りの関係性が生まれ、子どもの育ちにも好影響をもたらすものと期待したい。

(5) 専門職の関わり

参加者の中に何かしらの課題を抱えた人を発見した時に、連携体制が取れる専門機関を明確にしておく必要がある。おいでやす食堂は、表立って貧困世帯の子どもや生活困窮者を対象としているものではない。だが冒頭でも述べたように、子どもの貧困率が社会問題となり、そこから食堂ブームは生まれている。この取組を実施することで、地域の人と顔の見える関係となり、その中で何かしらの困難を抱えている人を発見することがあることが予測される。その場合に備え、福祉の専門職集団が在職している福祉施設としては、そのような地域住民に対し、何らかの支援をする責務があることを意識しておかなければならない。

おいでやす食堂のような取組みは地域のセーフティーネットとしての役割を担うために実施していると考えられるべきでもあるといえる。今後、子どもから高齢者、障がい者まで、それぞれの施策に応じた専門機関との連携体制の構築が必要になろう。西院デイは高齢者福祉の専門機関なので、児童家庭福祉や障害者福祉の施策には暗い。このたび、厚生労働省が打ち出した「地域共生社会」の考え方に基づくならば、当施設としても他分野の様々な機関とつながりを持ち、施策等の知識をもつ必要がある。

以上が現在の大きな課題として考察できる点である。小さなことから大きく運営の仕組みなどに関する事まで種々多岐にわたるものがあり、大切に継続を目的に取り組むには、ひとつひとつをじっくりと丁寧に課題をクリアしていくことが肝要だ。

2. 今後の展望として

(1) アンケート調査と運営スタッフへの聞き取りから

アンケート調査からは、表7のおいでやす食堂へご意見・要望において、「楽しみにしている。」「続けて欲しい。」との声が聞かれ、その理由として、図5-1において、「わいわい集まれる」「人と会えるから」「手軽に外食ができる」「安心できる場所」との理由が示された。そして、おいでやす食堂を継続していく上での、担い手の存在も図7の通りで、「お手伝い程度なら」や「運営にかかわりたい」「気持ちはある」「歩行不自由な私でも手伝える事があるなら」と言ってくれている17名がいる事が示された。これは、おいでやす食

堂を単なる食堂として利用しているだけでない意識があり、今後のおいでやす食堂の運営に良い影響を与えてくれるメンバーではないかと期待したい。

その一方で、今後の課題も挙げられている。表7からは、「レトルトの時間があって残念でした」「毎回、レトルトカレーだったのが残念でした」「来て、カレーが無くなっていたら残念です。前回、ショックで帰りました」との意見がきかれた事は、今後のおいでやす食堂運営にこの意見を反映させることが必要である。また、この課題については、運営スタッフからも、「もしレトルトになってしまったら、何かトッピングを付けて出してあげる工夫もできるかなと思います。また、ちょっと野菜を乗せてあげたりと豪華にしてあげたりして」や「社会福祉協議会などの地域の役員さんにおいでやす食堂開催日と地域行事が重なっていないかなどの動向を把握し、カレーの作る量を加減してもいいのかなと思いました」「カレーが18時半ごろに無くなってしまったときには、お客さんに、まだ18時半やと怒られてしまいました」ということが聞き取りをして把握できた。

また、その他の課題として、運営上の衛生面の課題や施設のスペースが小さいことも挙げられた。

上記のような様々な意見や課題が挙げられ、今後、おいでやす食堂を継続、発展させていくためのヒントが示された。本来、目指している「多世代交流の場」づくりに、例えば、図7で「お手伝い程度なら」「運営にかかわりたい」など言ってくれている17名を巻き込みながらの運営に発展させていくことはできないだろうか。その為には、施設職員だけではなく地域住民やボランティアが参加する会議やミーティング、作戦会議等が必要ではないかと考え、今後の提案とした。

(2) 地域に受け止められたその後を展望する

おいでやす食堂を始めるにあたり反省点として、地域にこの取組みに関してどのようなニーズがあるのかをしっかりと調査できていなかったことがある。今回、アンケート調査を実施したことにより、参加者には様々なニーズや思い、背景をもって参加していたことを把握することができた。同年代の人と話すことを目的としている人、食事そのものを楽しみに参加している人など、多様な目的があることを知り、この取組み

が色々な意味で地域住民に影響があることが理解できた。その中でも、おいでやす食堂を知ったきっかけを問う質問では、「知人から聞いた」「ママ友から聞いた」という回答が多かったことが興味深い。広報チラシでもなく、SNSでもなく、一度、この食堂を訪れたことのある人からの口コミが多い。これは、参加者が2度と行きたくない気持ちになれば口コミは広がらないし、そうでないからこそ拡散したと受け取れる。この食堂がもつ雰囲気や人と人が作用し合う中で生まれる空気感のようなものが良い形で参加者に伝わっているのではないか。こういった取組みの第一歩として、地域住民に受け入れられるというステップは超えられたのかもしれない。その意味で、アンケート結果で出た結果には意味があり、取組みの成果として裏づけが成されたと考えられる。

なお、今回は実施9か月という途中経過での調査であり、これからも継続的に調査研究を行い、根拠に基づいた実践となるよう心掛けなければならない。その際には、今回は不十分であった職員、ボランティアといった運営サイドも焦点化する必要がある。

3. 今後の展開として

1. で述べた課題を整理し、一定期間の中で丁寧かつ迅速に進めていくことでこの食堂が地域の居場所として有意義なものとなっていく。将来的展望として、取組を通じた人と人がつながり、様々な分野の各種団体や企業などとのつながりの中で地域に住民が集まれる居場所が複数生まれ、誰もが安心して暮らせるまちづくりにつながれば理想的である。例えば、おいでやす食堂に参加したことをきっかけに、福祉施設の存在を知った子どもやその親世代が気軽に施設に足を踏み入れ、不安や悩みがあれば、相談できるような関係性が築けたら安心してそのまちに暮らせる一つの要素になるのではないか。また、そういった居場所の拠点が小学校区単位に複数生まれれば、月1回に留まらず出入りできる場が増えることになり、住民同士の関係性も深まるのではないか。そういったまちづくりの一つの礎として発展させていく必要もある。地域住民が自身の地域で気兼ねなく活用できる社会資源と捉えるために住民主体の食堂運営のあり方を検討していくのも忘れてはならない。多種多様な人の繋がりあいの場を、住民の主体性が発揮される運営を模索すること、小学

校区単位など一定のエリアで構築されるネットワークを活かした地域づくりを今後の展開として進めていきたい。

また、西院デイとして、当初から目的としていた要介護高齢者が活躍できる場づくりについてもこの食堂の活動を通して、地域住民への理解を得るようにし、進展させるようにしていくことができればと考えている。それが、誰もが安心して暮らせるまちづくりにつながることを信じている。

V. おわりに

以上、本稿ではおいでやす食堂の取り組みに着目し、そこから時代のニーズに適う拠点づくりの在り方について論じてきた。その結果、地域に受け入れられる場として、1つの関門を越えたことはわかった。だが、軌跡を検証し、調査をすることで、目標に接近するためには多くの課題があることが明らかになった。まだまだ長い道のりが待っている。

全国各地で食堂運営が始まり、それぞれの地域で模索が続く。おいでやす食堂もその特色を出しながら、当初掲げたビジョンへ向けて第2、第3の関門を通していくことが、今、必要なことである。その中で調査研究も継続し、知見に基づいた前進を重ねていきたい。

注

- 1 高齢者福祉施設「西院」所長。
- 2 高齢者福祉施設「西院」調査研究チームリーダー。
- 3 「相対的貧困」とは、所得の中央値の半分を下回っている人の割合で、つまりその国の所得格差を表している数字とされる。
- 4 公益財団法人あすのばホームページ (<http://www.usnova.org/>) 20170830 取得
- 5 こども食堂ネットワークホームページ (<http://kodomoshokudou-network.com/>) 20170830 取得
- 6 滋賀の縁創造実践センターホームページ (http://www.shiga-enishi.jp/dining_map/index.php) 20170830 取得
- 7 湯浅誠 (2016) 「こども食堂」の混乱、誤解、戸惑いを整理し、今後の展望を開く」 (<https://>

- news.yahoo.co.jp/byline/yuasamakoto/20161016-00063123/) 20170830 取得
- 8 「シェア金沢」ホームページ (<http://share-kanzawa.com/index.html>) 20170904 取得
- 9 第1回の受付方法は年代別ではなかったため統計データ上は上がっていないが、18歳未満の子どもの参加は3名であった。
- 10 「こども食堂ネットワーク」(<http://kodomo-shokudou-network.com/>) や「こども食堂ネットワーク関西」(<http://kodomoshokudou-kansai-network/index.html>) には各地の子ども食堂のリストが掲載されている。
- 11 湯浅誠 (2017) 「こども食堂は第2ステージへ 地域性の獲得に向けて」(<https://news.yahoo.co.jp/byline/yuasamakoto/20170708-00073025/>) 20170902 取得
- 12 京都セカンドハーベストホームページ (<https://www.2hkyoto.org/>) 20170902 取得
- 13 長田英史 (2016) 『場づくりの教科書』 pp.20. 芸術新聞社

引用参考文献

- 厚生労働省 (2016) 『平成27年国民生活基礎調査の概況』
- 厚生労働省 (2017) 「我が事・丸ごと」地域共生社会実現本部関連資料
- 滋賀の縁想像実践センター編 (2017) 『子どもの笑顔を育む地域づくり～遊べる・学べる淡海子ども食堂をはじめよう』
- 市民セクター政策機構 (2016) 『社会運動—深刻化する子どもの貧困 子ども食堂を作ろう！—』ほんの木
- 全国社会福祉法人経営者協議会ホームページ (<https://www.keieikyo.gr.jp/index.shtml>) 20170901 取得
- 豊島子ども WAKUWAKU ネットワーク (編) (2016) 『子ども食堂をつくろう！～人とつながる地域の居場所づくり』、明石書店
- 長田英史 (2016) 『場づくりの教科書』 芸術新聞社
- 日本事業所内保育団体連合会 (2016) 『世代間交流施設の挑戦—保育と介護はどのように融合しているか』、あっぷる出版社
- はたらくよろこびデザイン室編 (2017) 『コトノネ

- Vol.21』はたらくよろこびデザイン室
- 仏子園ホームページ (<http://www.bussien.com/#/>) 20170914 取得
- 松本伊智朗他 (2016) 『子どもの貧困ハンドブック』かもがわ出版.
- 湯浅誠 (2016) 「「こども食堂」の混乱、誤解、戸惑いを整理し、今後の展望を開く」(<https://news.yahoo.co.jp/byline/yuasamakoto/20161016-00063123/>) 20170830 取得
- 湯浅誠 (2017) 「こども食堂は第2ステージへ 地域性の獲得に向けて」(<https://news.yahoo.co.jp/byline/yuasamakoto/20170708-00073025/>) 20170902 取得

謝辞

本稿の執筆に際し、「おいでやす食堂」を利用されている皆様、食堂を支えておられる地域の皆様、ボランティアとして参加している京都光華女子大学学生スタッフ、高齢者福祉施設「西院」の皆様から感謝申し上げます。

